

◆本書の特長

- ◆桐の文化と、桐樹の栽培技術の日本初の本格的大事典。
- ◆日本の桐文化の誕生、桐と文学、桐の商品群等々、桐にまつわる話題を豊富に収録。
- ◆約70年にわたり桐研究、桐樹栽培に携わってきた研究の集大成。
- ◆日長時間に基づく北方型・南方型2種の考察は、著者の新発見。
- ◆桐樹栽培の謎を解明した画期的研究成果。
- ◆図版284点、写真556葉、表106点収録。
- ◆カラー口絵(カラー写真78葉)。
- ◆巻末には主要用語索引を付す。

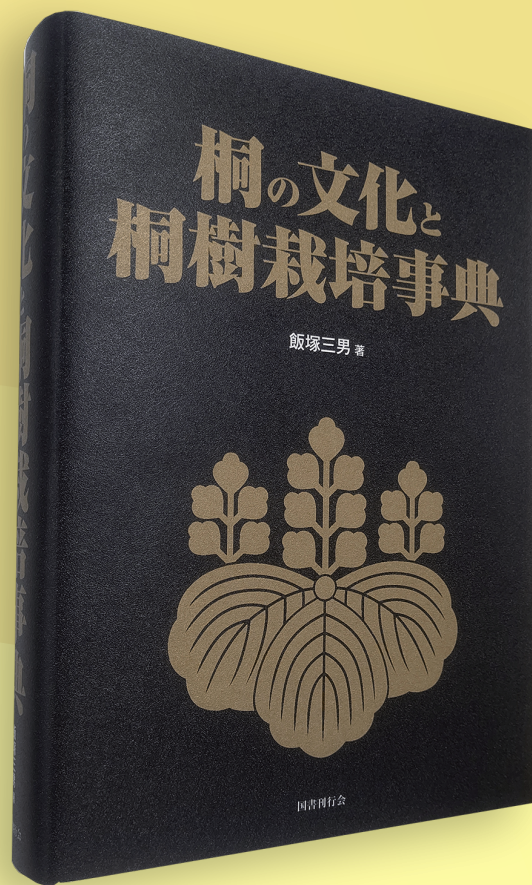
◆目次

まえがき	第2部 桐樹の栽培
第1部 桐の文化史	第1章 桐種子の特徴
第1章 桐の文化と歴史	第2章 桐樹の生育と環境
第2章 桐のいろいろな呼び方	第3章 桐樹の諸特性
第3章 桐と文学	第4章 謎の多いキリテングス病
第4章 桐材の性質とその利用生産	第5章 桐樹の分布と特性
	第6章 桐樹の栽培技術
	第7章 桐を身近に置いて楽しむ

■著者略歴

いいづか みつを
飯塚 三男

1926年、千葉県東金市に生まれる。1947年、高等農事講習所卒。同年、林業試験場(現森林総合研究所)に就職。赤沼試験地(埼玉県)、木曾分場(長野県)、本場(東京目黒、筑波学園都市)、浅川実験林(東京八王子)と転勤。木曾分場時代以外は桐の調査研究に従事する。在職中にインドネシア、フィリピン、タイの桐試験造林地の調査指導に赴く。1987年、同所辞職。中国林業科学院の招聘で桐の原生地域とみられる四川省の調査。また、河南省、安徽省などの調査に同行。現在は桐花鉢技術の確立をめざして試行中。



桐の文化と桐樹栽培事典

飯塚三男 著

造本：B5判・上製・728頁
定価：本体 25,000 円 + 税
SBN978-4-336-00000-0

桐の文化と 桐樹栽培事典

飯塚三男 著

桐

文化から栽培法まで
日本初の
総合的
大事典!!

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15 Tel.03-5970-7421 Fax.03-5970-7427
https://www.kokusho.co.jp e-mail:info@kokusho.co.jp

■申込書

この注文書に必要事項をご記入の上、最寄りの書店、または弊社(FAX.03-5970-7427/TEL.03-5970-7421)へお申込みください。
弊社へ直接お申込み場合は送料無料・代金引換便でお送りいたします。

帳合・書店印

『桐の文化と桐樹栽培事典』

飯塚三男 著

定価：本体25,000円+税

部
を申込みます。

お名前

ご住所

電話

桐は桐下駄や桐筆筥・^{きりだんす}・^{こと}・^{かぐらめん}神楽面の材料になるなど、生活に密着した樹として親しまれています。
その一方、桐の紋章は「菊の御紋」に次ぐ高貴なものとして神聖視されてきました。『源氏物語』桐壺の巻など、日本文化を彩ってきたことでも有名です。

国書刊行会



五七桐花紋

本書の構成 — 著者 飯塚三男 —

本書の構成は「第1部 桐の文化史」と「第2部 桐樹の栽培」の2部構成である。「第1部 桐の文化史」では、広く一般の方々にも見てもらうことを念頭に、世界的視野に立っての桐文化誕生の考察や、日本が世界一の桐材消費国であること、桐の種々の名称、桐と文学、桐材の性質と利用生産などを記述した。

一方、「第2部 桐樹の栽培」では、これから桐樹の植林を目指す方々や、桐樹栽培者・技術者向けに桐樹の特性に基づいた栽培技術の基礎的なことを述べた。桐になじみのない方々にも、桐に親しんでもらう手法も記した。ぜひ通読していただきたい。

会津地方の銘木の一つ（福島県大沼郡金山町水沼）



組見本①〈第 1 部 桐の文化〉（80%縮小）

第3節 日本人の桐樹観

41

2 桐地名と地形表現

桐地名には、桐の1字だけを使ったものもあるが、多くのものは他の形容詞と組み合わせたもので、なかには山・川といった市町村の境界をなすものでは、関係する市町村に重複して記載されるものもあり、それらを含めて188ある。それらの形容表現ごとにまとめてみると、大まかに見て山川といった地形表現と、動物や植物などの生物を示す生物表現とこれらに属さない、その他の人工物的なものなどに分けられる。この地形表現の中に先人の自然観のようなものがみとれる。

3 桐地名の地形表現の東西比較

桐地名の大半は地形表現の地名である。これは昔の人たちが生活の糧を得る場所として、土地の地形をよく見ていたことによるものとみられるが、この地形の見方に東と西でどうちがうかを較べたものが表1-4である。

表1-4 桐地名の地形表現の東西比較

地域区分	地形区分	凸地形					凹地形				
		山	岡	峠	崎	島	沢	谷	川	久保	洞
東日本		13	4	3	2	0	18	11	6	7	1
西日本		7	5	4	3	3	0	2	6	0	0

地域区分	地形区分	平坦地形				人工地形					合計
		原	野	平	浜	田	畑	堤	城	作	
東日本		10	2	3	1	1	3	0	1	3	89
西日本		9	7	0	0	0	0	1	0	0	47

（作：人工的建物壁）

桐地名の地形表現の65%強は北東日本でみられ、東西比較では圧倒的に東で多い。

地形表現を凸、凹、平坦、人工の4つに分け、東と西での出現数を較べると、東日本では凹地形の表現が約半数を占めるのに、西日本では凸地形の表現が約半数を占めていて、地形の見方に東と西ではちがいががある。

人工地形の表現は東西ともに少ないが、西日本で著しく少なくなっている。

近畿地方から瀬戸内、北九州にかけての一带は、かつて渡来系弥生人が広く勢力を拡げていた地域である。そのため彼らがもたらした水稻稲作は水田という場所で成り立っていたのだから、「田」の字の付く地名があってもよさそうなものである。しかし桐と結びつい

組見本②〈第 2 部 桐樹の栽培〉（80%縮小）

688

〔第2部 桐樹の栽培〕 第7章 桐を身近に置いて楽しむ

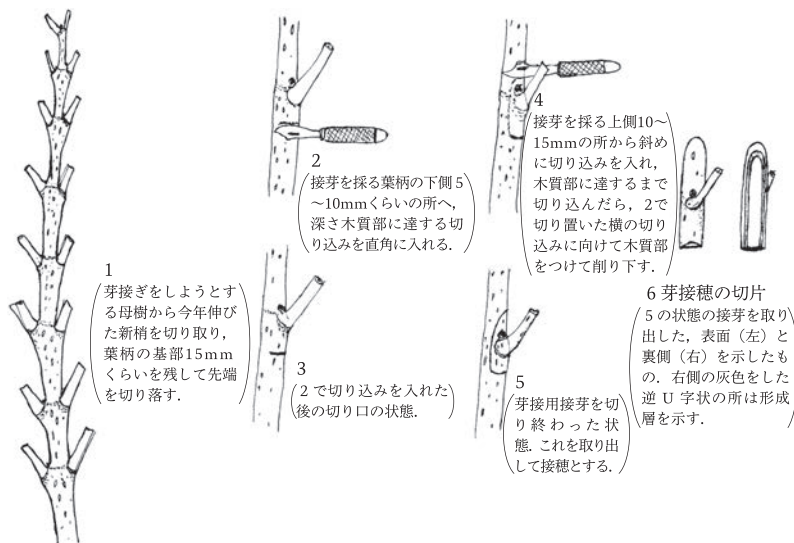


図7-21 芽接ナイフを使った芽接用接芽の作り方（図の番号順に行う）

きもこのことを考えて、あまり乾かさないように、直射光の下や風の強く当たる屋外での扱いは避けて行うようにする。

根は土中に生育し、表面に泥が着いているので、これを洗い落として使うなどの注意点は、すでにみてきたとおりである。また、根皮には多量の水分が含まれているので、砧根に切り込みを入れたときや、接穂を挿入するときなどに、剥落しやすいなどの難点があるので、これらの点にも注意して接木する必要がある。

接木の終わったものは、土中に埋めるので接木の接合部分から切り口に泥が入らないようにする。接木に使う接穂は蕾穂でも蕾の付かない無蕾穂でもよい。接ぎ終わったものは写真7-10のように、鉢か畑に植える。蕾枝を接いだ場合は、蕾のついた部分を残して土中に埋める。活着して新芽が伸びるようになったら、防乾用に覆っていた土は取り除く、このとき接穂の一部を含む接合部分は土中に在るように注意して土を取り除ける。

根砧を使って接いだものを、接木テープで巻縛すると、テープが土中に入ってしまうので、苗木砧に巻いたものに較べると、風化し難いので、放っておくと接合部で喰い込みが起こり折損しやすくなるので、活着後に切れ目を入れるか、解きほどこいてやる必要性が高い。打葉で巻縛すれば、土中で自然に腐朽分解するのでその心配はいらない。写真7-11に根砧に蕾枝の一代穂を接いだ開花状況を示した。

③芽接ぎ：桐では芽接ぎの出番は少ないが、盆栽風仕立てなどで、枝の無い所に枝を発

カラー口絵より（80%縮小）



写真1-2B バリの並木桐（2015年、飯島勤撮影）（77頁）



写真6-2G ニホンギリ（ムラサキギリ）の花紋（497頁）



写真1-2F 函館の庭木仕立桐（78頁）



写真6-69B 分根苗と実生苗のタンソ病被害比較（620頁）



写真6-6A ニホンギリとコノエギリ交配樹の花冠（504頁）

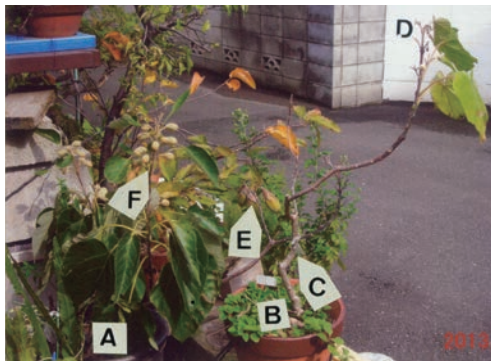


写真7-5A 呼び接ぎによる着花促進（668頁）